一般高校生と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験要因

天 貝 由美子¹MAIN EXPERIENTIAL FACTORS AFFECTING TRUST IN REGULAR
HIGH SCHOOL STUDENTS AND DELINQUENTS

Yumiko AMAGAI

The purposes of the present study were to explore experiential factors affecting the feeling of trust, and to search for a way to encourage the development of trust. Using either the free description or SCT method for 48 helping professionals (teachers and school counselors) and 102 high school students, a 64-item test was prepared to measure experiences affecting trust. The items and trust scale were administered to 456 high school students. The result of the factor analysis showed that experiences affecting trust had 4 dimensions: “experience of acceptance”, “experience of approval”, “experience of deep attachment with parents” and “painful experience from personal relationships (negative effect)”. Furthermore, experiences affecting trust for 160 high school boys and 71 male high-school aged delinquents were investigated. Multiple regression analysis showed that delinquents’ trust was mainly affected by experiences of approval and acceptance by adults, and that of regular high school boys by peer approval and experiences of personal-accomplishment. It was suggested that the path to self-confidence in adolescence follows a gradual shift in the locus of acceptance from adults to peers, and finally to self-acceptance.

Key Words : trust, effects, experiences, high school students, delinquents

問 題

信頼感の獲得と形成は、個人の精神的健康と密接に結びついており、それは青年期におけるカウンセリングの基本的な目標であることも指摘されている (Mitchell, 1990)。

Erikson(1959)は、乳幼児期の母子相互関係における基本的信頼の獲得と、“基本的信頼が基本的不信を上回るバランスを保つような永続的なパターンの確立 (p.273)”を健康なパーソナリティーの条件としてあげている。ところで、信頼感を“人や自分自身を安心して信じ、頼ることが出来るという気持ち”をとらえると、その発達はその後も継続し、中学生から大学院生

においては人や自分自身に対し信頼も不信も意識しない状態から、何らかの不信体験の克服を経て、信頼も不信も意識するがそれでも信頼の方が不信を上回る状態へと移行することが明らかになっている (杉原・天貝, 1996)。また、成人期から老年期にかけては、自分への信頼と不信とは相互に対立する関係から共存関係へと移行し、他人への信頼と不信とは対立関係から相互が独立した関係へと移行することも示されている (天貝, 1997a)。そして、信頼感を生涯発達の観点からとらえると、その高さ(量)は自分への信頼が青年期を頂点として安定するのに対し、他人への信頼と不信は共に高まり続けること、また、信頼感は10代から80代までの生涯に渡り Self-Esteem に肯定的な影響を及ぼし続けることも示されている (天貝, 1997b)。

このように、信頼感の生涯発達を考えると、青年期は不信体験の克服から新たな信頼感を模索する時期であり、また自己信頼が確立してゆく重要な時期であ

¹ 日本学術振興会・特別研究員 (筑波大学心理学系)
(Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of
Science [Institute of Psychology, University of Tsukuba])
現所属 大阪教育大学 (Osaka Kyoiku University)

ることが示唆される。また同時に、この時期の不信の過度の広がり、内閉化傾向など個人の精神的健康にとって否定的な影響をもたらすことが懸念される。そこで、信頼感の発達にはどのような要因が影響しているかが問題になる。

信頼感に影響を及ぼす要因については、これまでに、母親との親密な相互関係(Erikson, 1955, 1959)、裏切られ体験の有無(Hansson, Jones & Fletcher, 1990)、親の信頼感の高さ(Katz & Rotter, 1969)等が指摘されているが、いずれも断片的なものである。ここで信頼感の生涯発達を考える際、乳幼児に適用されたEriksonの理論をそのまま思春期以降に適用するのではなく、思春期・青年期の彼ら自身また彼らの発達援助者の信頼感のとらえ方をもとに、その時点においてどのような要因が信頼感に影響を与えているかを明らかにすることにより、信頼感の発達に関する示唆の一端が得られると考えられる。そこで、今回は、信頼感に影響を及ぼす要因を過去経験として取り上げ²、高校生自身および彼らの発達援助者である教師やスクールカウンセラー等の視点から、信頼感に影響する経験要因を明らかにすることを第1の目的とする。

さて、従来、非行少年は信頼感が乏しく不信感が強いとされてきた(麦島, 1990)。不信の緩和と信頼感獲得への援助は、犯罪という反社会的な行動を表出させる少年達にとってより緊急度が高く、困難が多いことも指摘されている(藤田, 1992)。そこで本研究では、一般高校生と同じ思春期・青年期にある非行少年の信頼感とそれに影響を及ぼす経験の内容を明らかにする。そして、カウンセラー、教師、家族等による、思春期・青年期にある生徒の望ましい信頼感の発達への援助について考察することを第2の目的とする。

研究1 信頼感に影響を及ぼす過去経験の項目の収集

目的 筆者が行ったこれまでの研究では、人一般の生涯に渡る信頼感の発達について明らかにしてきた(一般的集団における信頼感の発達経路; e.g., 天貝, 1997a)。しかし信頼感の発達自体も、各個体ごとに異なる様々な要因によって、変化すると考えられる。つまり、個人における生涯の信頼感の発達(個別的な信頼感の発達経路)

についてもまた、明らかにする必要がある。そこでここでは、信頼感に影響を及ぼしてきた、あるいは現在も影響を及ぼしていると考えられる要因を、個人史の中での過去経験という形で取り上げ、検討する。なお、信頼感に影響を及ぼす過去経験を測定する際に、(a)高校生自身が捉えているその実態を把握するための、高校生自身の視点、および(b)信頼感の望ましい発達を促進するための、彼らの発達援助者である教師およびカウンセラーの視点、の両面から取り上げた。本研究は、方法論的にあくまで現時点における両者の意識的側面での、信頼感への影響経験を測定しているに過ぎないという限界があると考えられるが、今後、乳幼児期の体験を含めた信頼感の構築について検討していく足がかりとなると考え、取り上げた。

(1)信頼感影響経験測定項目の収集

方法 1) 教師およびカウンセラーからの項目の収集

調査時期 1996年5月～9月。

被調査者 中学生または高校生の指導や相談活動を行っている教師・カウンセラー等48名(教師20名、スクールカウンセラー5名、保護観察官・児童相談所心理判定員23名、平均年齢39.8歳[23歳～65歳, SD=9.37], 平均指導/相談経験年数14.7年[1年～36年, SD=8.59], 男性28名, 女性20名)。

実施方法 郵送法による、自由記述方式の質問紙調査。

調査内容 中・高校生の信頼感に影響を与えていると思われる事柄についての自由記述を求めた。具体的

³ 「本研究では、信頼感を“自分あるいは人に対して抱く信頼できるという気持ち”と幅広くとらえています。つまり、信頼できる対象として、自分自身・特定の他者・人一般を含むものとらえています。

また信頼・不信の関係で、(a)信頼感と不信感を表裏一体のものとしてとらえる見方(i.e.信頼感=不信感のないこと)と、(b)信頼感と不信感を別次元のものとしてとらえる見方(i.e.信頼感と不信感が両方高いタイプ/信頼感が高く不信感が低いタイプ/信頼感が低く不信感が高いタイプ/信頼感も不信感も両方低いタイプの4つがある)の2つのとらえ方があります。これまでの研究は、後者(b)の立場で研究を進めてまいりました。そこで、以後お尋ねすることに関しましては、“不信感”との関連でとらえられる点がありましたら、前述しました2つの見方についての先生のお考えも含めまして、ご記述ください」

「これまで、中・高校生の信頼感を測定する尺度を作成し、その現状について調査を行ってききましたが、今回、中・高校生の持つ信頼感にはどのような要因が影響しているかを詳細に検討する必要が出てまいりました。つまり、現在、中・高校生の持っている信頼感が欠如している状態ならばその回復を、そして信頼感の発達を促す援助への示唆を得たいと考えております」

² 本研究でとらえた過去経験は、本人の主観的な思い出としての経験である。この、ライフイベントよりも抽象的で一般的な過去経験が、実際には主観的信頼感の形成に影響を与えていると仮定して、本研究ではこの過去経験を指標とし選んだ。また、質問紙では“あなたが生まれてからこれまでの経験についてお聞きます”と教示した。

には、“中・高校生の信頼感は何によって決まってくるか／何によって影響を受けるか”“信頼感を促進する要因として考えられることは何か”についての記述を求めた。その際、被調査者には、本研究での信頼感の定義と研究の目的の説明を記述³した依頼状、およびこれまでの研究の流れとその結果の資料⁴を調査用紙に添付し、本研究での信頼感のとらえ方を示した。

記述の分類 収集された記述を筆者がKJ法により分類した結果、信頼感に影響を与える経験として以下の7つのカテゴリーが見出された；(a)達成経験：物事に取り組み、それらを成し遂げたり、良い結果を出せたという経験、(b)認められ経験：人から認められたという経験、(c)受け入れられ経験：人からのありのままの自分を受け入れられたと感じた経験、(d)親との親密な関わり経験：親と互いに密接に関わりあった経験、(e)裏切られ経験：人から裏切られたと感じた経験、(f)集団参加経験：集団の中でのやりとり実際に参加した経験、(g)モデリング経験：親以外の他者をモデルとして見習おうとした経験。

2) 高校生からの項目の収集

調査時期 1996年6月～7月。

被調査者 私立普通高等学校2年生102名(男子46名、女子56名)。

実施方法 授業時間内の集団形式による、自由記述方式の質問紙調査。

調査内容 信頼感尺度を構成する3下位尺度(自分への信頼、他人への信頼、不信)のそれぞれについて最も高い因子負荷量を持った1項目ずつの計3項目⁵について、「それは・・・だからです」の形式でのSCTによる回答を求めた。

記述の分類 収集された記述を筆者がKJ法により分類した結果、信頼感に影響を与える経験として以下の7つのカテゴリーが見出された；(a)達成経験、(b)認められ経験、(c)受け入れられ経験、(d)親からの受け入れられ経験：親から受け入れられていると感じた経験、(e)裏切られ経験、(f)集団参加経験、(g)モデル対象との出会い経験：自分のモデルとなるような親以外の他者と出会った経験。

(2) 信頼感影響経験測定項目の作成と検討

1)および2)で得られた各々7つのカテゴリーの内容はほぼ対応していたため、主に1)での命名に準拠して項目の作成と検討を行った。まず、得られた自由記述について再度検討し、その表現や内容を高校生の生活場面での文脈に即するように修正した。次に、作成された全ての項目の内容的妥当性を高めるため、心理学専攻の大学院生4名により(a)項目内容のカテゴリーへの合致性、(b)カテゴリーの項目内容への合致性、(c)質問項目の言語表現の適否、が検討され、問題点が指摘された項目については修正または削除を行った。その結果、最終的に64項目⁶が作成された。

研究2 高校生の信頼感に影響を及ぼす経験要因

目的 作成した信頼感影響経験測定項目を用い、高校生の信頼感に影響を及ぼす経験にはどのような側面があるのかを因子分析によって検討する。また、信頼感影響経験の各側面が、信頼感の3側面である自分への信頼・他人への信頼・不信にどのように影響するのかを重回帰分析によって明らかにする。

方法 調査時期 1996年10月～12月。

被調査者 関東地方および中部地方の公立普通高等学校2校・公立職業高等学校(工業高校)1校の1年生147名(男子65名、女子82名)、2年生212名(男子126名、女子86名)、3年生97名(男子81名、女子16名)の計456名(男子272名、女子184名)。平均年齢16.5歳(SD=.84)。

調査内容 (a)信頼感尺度(天貝,1995b)：24項目、4件法、(b)信頼感影響経験測定項目：予備調査によって作成された64項目、回答は「かなりある」から「全くない」までの4件法で求め、経験が多いほど高得点となるように得点化された。

調査は、担当教師の教示により集団形式で実施された。回答所要時間は約30分であった。

結果と考察 1) 信頼感影響経験測定項目についての因子分析 まず、信頼感に影響を及ぼす経験を測定するための64項目に対しSMCを求める方法により各項目の共通性を算出し、共通性が.30未満の21項目を削除した。この時点で43項目が残った。次に、主因子法による因子分析を行った。Varimax回転後(TABLE 1)、仮定された7因子は抽出されず、解釈可能な4因子が抽出された。第1因子は“誰かに自分の話を十分聞い

⁴ 信頼感尺度(天貝,1995b)の項目、中学生から大学院生に渡る信頼感類型の発達仮説モデル(試案)図(杉原・天貝,1996)、信頼感4類型における自由記述例(天貝,1995a)からなる。

⁵ 天貝(1995b)の結果に基づき、自分への信頼では“私は、自分自身を、ある程度は信頼できる”、他人への信頼では“これまでの経験から、他人もある程度は信頼できると感じる”、不信では“所詮、周りは敵ばかりだと感じる”の項目を使用。

⁶ 各カテゴリーの項目数は以下の通りである；(a)達成経験(9)、(b)認められ経験(11)、(c)受け入れられ経験(15)、(d)親との親密な関わり経験(12)、(e)裏切られ経験(6)、(f)集団参加経験(8)、(g)モデリング経験(3)。

TABLE 1 高校生における信頼感影響経験の因子分析(Varimax 回転後)

項目	F1	F2	F3	F4	共通性
60.誰かに自分の話を十分聞いてもらったことがありますか(b)	.677	.188	.093	.040	.505
61.グループの友達に、本音を打ち明けたことがありますか(f)	.665	.189	.051	.061	.485
56.「この人は自分のことをわかろうとしてくれている」と感じたことがありますか(c)	.650	.247	.226	-.019	.535
50.自分の考えで人にはあまりいいたくないようなことを話し、理解してもらえたときがありますか(c)	.647	.099	.087	.111	.449
37.誰かと接していて、「この人は本当に私のことを思ってくれているんだ」と感じたことがありますか(c)	.623	.285	.269	-.001	.542
48.グループの友達に、自分の気持ちや思っていることをいいましたか(f)	.615	.134	.065	.069	.406
18.誰かに対して、「この人は私の「いい面だけでなく」悪い面もわかってくれている」と感じたことがありますか(c)	.595	.195	.114	.108	.418
55.仲間と一緒に苦しんだことがありますか(f)	.595	.320	.003	.064	.460
57.仲間が、あなたのことをそのまま認めてくれたことがありますか(b)	.592	.264	.236	-.078	.483
32.誰かに自分の気持ちを受け入れてもらえたと感じたことがありますか(c)	.591	.305	.172	.069	.476
65.仲間と一緒に喜んだり悲しんだりしたことがありますか(f)	.568	.234	.121	.087	.400
11.苦しいとき、誰かが最後まで一緒につきあってくれたことがありますか(c)	.532	.260	.178	.028	.383
53.誰か、自分のことをいつも気にかけてくれていてと感じたことがありますか(c)	.526	.227	.340	-.017	.444
23.どんなに悪いことをしても、「この人だけはわかってくれる／かばってくれる」と感じたことがありますか(c)	.508	.185	.239	-.033	.351
25.「(行動や人に対しての)きらいだ／いやだ」という気持ちを誰かにわかってもらったことがありますか(c)	.485	.188	.143	.169	.320
54.性格について、ほめられたことがありますか(b)	.449	.390	.232	-.076	.414
42.誰か、本当に自分のことを思って、自分のことを叱ってくれたことがありますか(c)	.410	.177	.371	.121	.352
17.グループの中で、何か役割が与えられたことがありますか(f)	.156	.632	.074	.061	.433
4.グループのために、何か活躍したことがありますか(f)	.262	.618	.055	.010	.454
52.誰かに、自分の得意なものを認めてもらったことがありますか(b)	.276	.610	.199	.020	.489
22.グループの中で、リーダーになったことがありますか(f)	.186	.600	.025	.059	.400
36.(グループの中で)自分の役割をうまくやり遂げたことがありますか(a)	.192	.577	.130	.026	.388
45.誰かに、何か大切なことを任(まか)されたことがありますか(b)	.268	.559	.129	.114	.414
24.誰かに、自分のよい点を指摘されたことがありますか(b)	.460	.513	.216	.040	.524
29.自分がしたことを、ほめてもらったことがありますか(b)	.352	.507	.293	-.011	.467
8.あなたがしてあげたことで、誰かに感謝されたことがありますか(b)	.297	.502	.202	.209	.426
9.無理だと思ったいたことでも、自分でやってみたら成功したことがありますか(a)	.303	.463	.151	.013	.329
2.スポーツについて、ほめられたことがありますか(b)	.130	.462	.047	-.105	.244
43.(体育祭など)何かをみんなでやって、うまくいった／良い成績を残せたことがありますか(a)	.371	.443	.136	.040	.354
10.勉強について、ほめられたことがありますか(b)	.065	.424	.161	.043	.212
16.スポーツをやってみて、「自分も「なかなか」できるんだ」と感じたことがありますか(a)	.132	.419	.110	-.112	.218
26.親と遊んだことがありますか(d)	.074	.171	.659	.091	.478
33.親に甘えたことがありますか(d)	.185	.123	.642	.115	.476
49.親に対し「[親は]すごいなあ」と尊敬の気持ちをもった出来事がありますか(d)	.174	.134	.560	-.066	.366
44.親は親自身の経験を話してくれたことがありますか(d)	.143	.125	.503	.066	.294
58.親から(とても)ほめられたことがありますか(d)	.247	.383	.476	-.047	.437
12.親に抱きしめられたことがありますか(d)	.209	.109	.465	.097	.281
63.人と関わってひどく傷ついたことがありますか(e)	.147	.004	-.055	.822	.700
62.人との関係の中で思い出したいくないようなつらいことがありましたか(e)	.110	.101	-.015	.720	.541
6.人からひどく裏切られたことがありますか(e)	.018	-.033	-.018	.666	.446
59.「もう人と関わって嫌な思いをしたくない」と感じたことがありますか(e)	.040	-.040	.058	.656	.437
13.集団の中で、仲間外れになったと感じたことがありますか(e)	-.090	-.031	.126	.498	.273
(21.)親が悩んだり苦しんだりしているところを見たことがありますか(d)	.143	.085	.133	.368	.181
二乗和	6.91	5.14	2.89	2.41	17.35
寄与率(%)	29.7	22.1	12.4	10.3	74.5

()内は仮定されたカテゴリ

てもらったことがありますか”“この人は自分のことをわかってしてくれている”と感じたことがありますか”などの17項目からなり、「受容経験」因子と命名された。これは先に分類された「受け入れられ経験」「集団参加経験」「認められ経験」を包括する内容であった。第2因子は“グループの中で、何か役割が与えられたことがありますか”“誰かに、何か大切なことを任されたことがありますか”などの14項目からなり、「承認経験」因子と命名された。これは先に分類された「認められ経験」「達成経験」「集団参加経験」を包括する内容であった。第3因子は“親と遊んだことがありますか”“親に甘えたことがありますか”などの6項目からなり、「親との親密な関わり経験」因子と命名された。これは先に分類された「親との親密な関わり経験」に対応する内容であった。第4因子は“人と関わってひどく傷ついたことがありますか”“人との関係の中で思い出したくないようなつらいことがありましたか”などの6項目からなり、「対人的傷つき経験」因子と命名された。これは先に分類された「裏切られ経験」を中心とした否定的な経験の内容であった⁷⁾。

2) 信頼性の検討 各因子に属する項目の合計得点をもって各尺度得点とし、各尺度の内部一貫性をCronbachの α 係数により検討した。「受容経験」では.92,「承認経験」では.87,「親との親密な関わり経験」では.78,「対人的傷つき経験」では.77であった。ここから、各尺度において十分な内部一貫性があると考えられた。

3) 重回帰分析による高校生の信頼感に影響を及ぼす経験の検討 高校生全体について、信頼感の3側面の各々を単独で目的変数⁸⁾、1)で抽出された4つの経験要因を説明変数⁹⁾とする重回帰分析を行った。その結果

TABLE 2 高校生における信頼感に影響を及ぼす経験の重回帰分析

	(標準偏回帰係数)		
	自分への信頼	他人への信頼	不信
受容経験	.007	.499**	-.296**
承認経験	.424**	.105*	.002
親との親密な関わり経験	.106*	.081+	-.003
対人的傷つき経験	-.125**	-.354**	.519**
説明率(R ²)	.245**	.459**	.324**

(** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.1$)

から、自分への信頼には、自分の長所を指摘されるなど人から認められたり、自身で達成感をもてたりする経験が有効に機能すると考えられた。そして、他人への信頼には「受容経験」を中心に「承認経験」、「対人的傷つき経験」(負の影響)の3経験が、不信には「対人的傷つき経験」と「受容経験」(負の影響)の2経験が有意な影響を及ぼした。ここから、自分という存在をそのまま受け入れてもらい尊重されていると感じられる受容経験は、他人への信頼を高め不信を低減させる影響があり、実際に人と関わり傷ついてしまった経験は他人への信頼を低め不信を増大させることが指摘された。

研究3 非行少年と一般少年の信頼感影響経験の比較

目的 悩みや問題行動を抱えた青年期の生徒の教育的援助には、教師・カウンセラーなど、生徒にとって身近で具体的な他者との間に揺るぎない信頼感を構築し、それを人一般に広げていくことが有効であるという指摘(Mitchell, 1990)がある。また藤田(1992)は、非行少年の矯正教育における信頼感構築の重要性を指摘しており、基本的信頼感の獲得の乏しさが顕著な非行少年ほど“何度も何度も執拗に治療者の愛情が本物かどうかを試そうとするであろう(p.258)”と述べ、治療者との関係の中での信頼感の確立を問題軽減の大きな目標の一つにあげている。このような指摘を踏まえ、ここでは一般少年(高校生男子)と非行少年(少年院生男子)の持つ信頼感の内容および両者の過去経験の信頼感への影響の仕方を明らかにすることにより、これまでに得られた信頼感の発達に関する成果を、主に教師やカウンセラー等彼らの発達援助者が活用できるような方途について検討する¹⁰⁾。

⁷⁾ なお第4因子に該当した項目21は、寄与率が.40未満であったため、削除した。

⁸⁾ 信頼感の3側面各々の相関係数は、「自分への信頼」と「他人への信頼」との間が.47,「自分への信頼」と「不信」との間が-.07,「他人への信頼」と「不信」との間が-.39であった。

⁹⁾ なお、これら4つの信頼感影響経験の相関係数は、「受容経験」と「承認経験」との間が.67,「受容経験」と「対人的傷つき経験」との間が.09,「承認経験」と「親との親密な関わり経験」との間が.50,「承認経験」と「対人的傷つき経験」との間が.09,「承認経験」と「親との親密な関わり経験」との間が.47,「対人的傷つき経験」と「親との親密な関わり経験」との間が.11であった。

方法 調査時期 1996年10月～12月。

被調査者 一般群として公立高等学校3校の男子生徒160名(平均年齢17.2歳[15-18歳], SD=.47)および非行群¹¹として少年院2院の男子生徒71名(平均年齢17.3歳[14-20歳], SD=.76)。

調査内容 (a)信頼感尺度(天貝, 1995b): 24項目, 4件法, (b)信頼感影響経験測定項目: 研究2で検討された42項目, 4件法。なお, 各項目で文中に“親”“仲間”などの対象が明記されていないものについては, その対象を「親・友人・先生¹²・その他」から1つ選択させた(e.g. 誰かに自分の話を十分聞いてもらったことがありますか→「かなりある～全くない」→それは誰にですか「親・友人・先生・その他」)。

調査は, 少年院1院においてのみ各自が部屋に持ち帰っての個別形式で実施され, その他(高校3校および少年院1院)では担当教師の指示により集団形式で実施された。回答所要時間は45分～1時間であった。

結果 1) 一般少年と非行少年の信頼感尺度得点の比較 まず, 信頼感各下位尺度での平均得点を算出し, 一般群(高校生男子)と非行群(少年院生男子)とで差異が見られるかどうかをt検定により比較した。その結果(TABLE 3), 「不信」においてのみ有意差が見られ, 非行群の方が一般群に比べて不信が高かった。「自分への信頼」および「他人への信頼」では, 両群の間で有意差は見られなかった。

次に, 信頼感尺度を構成する各項目毎に平均得点を算出し, 一般群と非行群とで差異が見られるかどうかをt検定により比較した。その結果(TABLE 4), 自分への信頼では, “24.私は, 自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信を持っている”(t=2.23, p<.05), 他人への信頼では, “4.これまでの経験から, 他人もある程度は信頼できると感じる”(t=2.13, p<.05), “9.周りのほとんどの人は私を信頼してくれているだろう”(t=4.14, p<.01), に有意差が見られ, いずれも一般群の方が非行群に比べ得点が高かった。また不信では, “21.自分で自分をしっかり守っていない

TABLE 3 一般群と非行群の信頼感尺度得点の平均と標準偏差

	一般少年	非行少年	t 値
自分への信頼	16.70(3.19)	16.71(2.92)	.02
他人への信頼	22.18(4.55)	21.12(4.55)	1.63
不信	24.70(5.87)	< 26.94(5.51)	2.67**

(**p<.01)

いと, 壊れてしまいそうな気がする”(t=2.79, p<.01), “22.過去に, 誰かに裏切られたりだまされたりしたので, 信じるのが怖くなっている”(t=4.09, p<.01), “19.私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう”(t=2.30, p<.05), “13.人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう”(t=4.48, p<.01), に有意差が見られ, いずれも非行群の方が一般群に比べ得点が高かった。また, 他人への信頼の“3.私は多少のことがあっても, 今の信頼関係を保っていけると感じる”(t=1.80, p<.1), 自分への信頼の“18.私は, 自分自身が, 信頼に値する人間だと思う”(t=1.81, p<.1), の項目では, 一般群の方が非行群に比べ得点が高い傾向があり, 不信の“8.所詮, 周りは敵ばかりだと感じる”(t=1.74, p<.1)の項目では, 非行群の方が一般群に比べ得点が高い傾向があった。

2) 一般少年と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験の比較 信頼感影響経験の信頼感3側面への影響の

TABLE 4 一般群と非行群の信頼感尺度項目得点の比較

	一般少年	非行少年	t 値
自分への信頼	18.私は, 自分自身が, 信頼に値する人間だと思う	2.30(.87) (○)	2.08(.84) 1.81*
24.私は, 自分自身の行動をある程度はコントロールすることができるという確信を持っている	3.03(.86)	> 2.74(.95)	2.23*
他人への信頼	4.これまでの経験から, 他人もある程度は信頼できると感じる	2.75(.82)	> 2.49(.93) 2.13*
3.私は多少のことがあっても, 今の信頼関係を保ていけると感じる	2.96(.82) (○)	2.74(.95)	1.80*
9.周りのほとんどの人は私を信頼してくれているだろう	2.30(.73)	> 1.87(.73)	4.14**
不信	8.所詮(しよせん), 周りは敵ばかりだと感じる	2.22(.97) (○)	2.46(.99) 1.74*
21.自分で自分をしっかり守っていないと, 壊れてしまいそうな気がする	2.79(1.00)	< 3.18(.86)	2.79**
22.過去に, 誰かに裏切られたりだまされたりしたので, 信じるのが怖くなっている	2.15(.99)	< 2.73(.95)	4.09**
19.私はなぜか人に対して疑り深くなってしまう	2.72(.87)	< 3.02(1.02)	2.30*
13.人は自分のためなら簡単に相手を裏切ることができるだろう	2.27(.99)	< 2.91(.97)	4.48**

(**p<.01, *p<.05, +p<.1)

¹⁰ 非行少年を対象とした調査では, 社会的望ましきへの歪曲した反応が出る可能性が指摘されている(e.g. 麦島, 1990)。そこで, 本研究では, 信頼感影響経験の量的な比較ではなく, その経験が信頼感にどのように影響するかを方向性を中心に検討することにする。

¹¹ 非行少年は, 一般に, 犯罪少年, 触法少年, ぐ犯少年の3種からなるが, 今回はその中で, 何らかの犯罪を行い, 現在少年院に収容され矯正教育や職業訓練等を受けている14歳以上の男子生徒を対象とした。

¹² 少年院教官を含むものとした。

仕方が一般群と非行群でどのように異なるかを検討するため、一般群および非行群のそれぞれに対し、信頼感3側面の各々を単独で目的変数、4つの経験を説明変数とする重回帰分析を行った(TABLE 5)。これら4つ

TABLE 5 一般群および非行群における信頼感に影響を及ぼす経験の重回帰分析

	一般群			非行群		
	自分への信頼	他人への信頼	不信	自分への信頼	他人への信頼	不信
受容経験	.028	.612**	-.407**	.318*	.373*	-.266
承認経験	.406**	.024	.043	.344*	.182	-.126
親との親密な関わり経験	.063	.061	.018	-.067	-.186	.245
対人的傷つき経験	-.181**	-.424**	.561**	.066	-.116	.365**
説明率(R ²)	.213**	.531**	.398**	.336**	.219**	.264**

(** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.1$)

の経験要因による信頼感の説明率は、自分への信頼では非行群の方が一般群に比べ説明率が高かった。

信頼感の各側面毎に見ると、自分への信頼には、一般群では「承認経験」が中心となり有意な影響を及ぼしていたのに対し、非行群では、有意であったのは「承認経験」のみであったが数値的には「受容経験」も同じように影響力を示した。他人への信頼には、一般群では「受容経験」および「対人的傷つき経験」(負の影響)が有意な影響を及ぼし他の2経験はほとんど影響がなかったのに対し、非行群では有意であったのは「受容経験」のみであった。不信には、一般群では「対人的傷つき経験」および「受容経験」(負の影響)が有意な影響を及ぼし他の2経験はほとんど影響がなかったのに対し、非行群では有意であったのは「対人的傷つき経験」のみであった。

さらに、信頼感に影響を及ぼす経験をより詳細に検討するために、一般群と非行群のそれぞれに対し、信頼感3側面の各々を単独で目的変数、有意な影響の認

TABLE 6 項目毎に見た信頼感に影響を及ぼす経験

(信頼感3下位尺度を目的変数、信頼感影響経験測定項目を説明変数とした重回帰分析)

(標準偏回帰係数)

一般少年		非行少年	
自分への信頼	17. グループ内での役割付与経験(.165*)	8. 自分の行動の有用性経験(.425**)	R ² =.294**
	52. 得意なものを認められた経験(.127+)	16. スポーツでの効力感経験(.282*)	
	6. 人からひどく裏切られた経験(-.224**)		
	36. グループ内での役割遂行経験(.163*)		
	8. 自分の行動の有用性経験(.169*)		
R ² =.257**			
他人への信頼	37. 「本当に自分のことを思ってくれている」と感じた経験(.200**)	11. 苦しいときの共有体験(.323*)	R ² =.249**
	57. 仲間からありのままの自分を認められた経験(.161**)	32. 気持ちを受け入れられた経験(.253*)	
	6. 人からひどく裏切られた経験(-.174**)		
	55. 仲間との苦しみの共有経験(.181**)		
	59. 人との関わりに対する恐怖経験(-.122*)		
	53. 自分のことをいつも気にかけてくれていると感じた経験(.164**)		
不信	60. 話を十分に聞いてもらった経験(.177**)		R ² =.125**
	62. 人との関係の中での思い出したくない経験(-.158*)		
	6. 人からひどく裏切られた経験(.344**)	6. 人からひどく裏切られた経験(.354**)	
	57. 仲間からありのままの自分を認められた経験(-.318**)		
	59. 人との関わりに対する恐怖経験(.244**)		
不信	42. 本当に自分のことを考えて叱ってくれた経験(-.190**)		R ² =.448**
	23. 「この人だけはわかってくれる」と感じた経験(-.140*)		
	13. 集団の中での仲間外れ体験(.126*)		

(** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.1$)

められた経験に属する項目全てを説明変数として、ステップワイズ式による重回帰分析を行った。その結果 (TABLE 6), まず, 自分への信頼は, 一般群では“17. グループ内での役割付与経験”, “36. グループ内での役割遂行経験”, “8. 自分の行動の有用性経験”, “6. 人からひどく裏切られた経験 (負の影響)” から, 非行群では “8. 自分の行動の有用性経験” および “16. スポーツでの効力感経験” から説明された。他人への信頼は, 一般群では “37. 「本当に自分のことを思ってくれている」と感じた経験”, “57. 仲間からありのままの自分を認められた経験”, “55. 仲間との苦しみとの共有経験”, “53. 自分をいつも気にかけてくれていると感じた経験”, “60. 話を十分に聞いてもらった経験”, “6. 人からひどく裏切られた経験 (負の影響)”, “59. 人との関わりに対する恐怖経験 (負の影響)”, “62. 人との関係の中での思い出したくない経験 (負の影響)” から, 非行群では, “11. 苦しいときの共有体験”, “32. 気持ちを受け入れられた経験” から説明された。不信は, 一般群では主に “6. 人からひどく裏切られた経験”, “57. 仲間からの承認 (負の影響)”, “59. 人との関わりに対する恐怖経験” から, 非行群では “6. 人からひどく裏切られた経験” のみから説明された。

3) 信頼感に影響を及ぼす対人的影響源 信頼感影響経験での対人的影響源 (対象) が, 非行群と一般群とで異なっているかどうかをカイ二乗検定によって検討した。その結果 (TABLE 7), 対象の選択がなされた23項目中17項目において選択数に有意差が見られた。すなわち, 「友人」の選択数は, 有意差のあった14項目全てにおいて非行群よりも一般群においての方が多く, 「親」「先生」「その他」の選択数は, 各々有意差のあった項目のほぼ全てにおいて非行群の方が一般群よりも多かった。なお, “10. 勉強についてほめられた経験” では一般群の方が非行群よりも多く「親」を選択していた。

考察 1) 一般少年と非行少年における信頼感 男子における一般群 (高校生) と非行群 (少年院生) とで, 信頼感の各側面の得点について比較したところ, 自分への信頼および他人への信頼という信頼感の肯定的な側面においては両群の間に差異は見られなかった。しかし, 不信という信頼感の否定的な側面において両群の間に明確な差異が見られ, 非行群は一般群に比べ不信が高いことが示された。ここから, 青年期の教育臨床では不信の緩和が重要であることが指摘される。自分への信頼や他人への信頼を構築しようとするよりも, むしろ不信を和らげることによって, 信頼感全体の肯

TABLE 7 信頼感影響経験の対象のカイ二乗分析

	χ^2	親	友人	先生	その他
2. スポーツについてほめられた経験	14.15**	n.s.	>**	<+	<*
6. 人からひどく裏切られた体験	n.s.				
8. 自分の行動の有用性経験	n.s.				
10. 勉強についてほめられた経験	13.78**	>**	n.s.	<*	n.s.
11. 苦しいときの共有体験	18.65**	<*	>**	<*	<*
18. 「悪い面もわかってくれている」と感じた経験	33.85**	<*	>**	<*	<*
23. 「この人だけはわかってくれる」と感じた経験	n.s.				
24. よい点を指摘された経験	25.42**	<*	>**	<*	<*
25. 否定的感情をわかってもらった経験	36.14**	<*	>**	<*	<+
29. 行動をほめられた経験	n.s.				
32. 気持ちを受け入れられた経験	30.46**	n.s.	>**	<*	n.s.
37. 「本当に自分のことを思ってくれている」と感じた経験	42.68**	<*	>**	<*	<*
42. 本当に自分のことを考えて叱ってくれた経験	7.41+	n.s.	n.s.	n.s.	<*
45. 大切なことを任 (まか) された経験	10.93**	n.s.	n.s.	n.s.	<*
50. 人にはあまり言いたくない自分の考えを理解された経験	15.42**	n.s.	>**	<*	n.s.
52. 得意なものを認められた経験	12.64**	n.s.	>**	<*	n.s.
53. 自分をいつも気にかけてくれていると感じた経験	12.15**	n.s.	>**	<*	n.s.
54. 性格についてほめられた経験	13.41**	n.s.	>**	<*	n.s.
56. 「自分のことをわかってもらっていて」と感じた経験	14.57**	<*	>**	<*	n.s.
59. 人との関わりに対する恐怖経験	n.s.				
60. 話を十分に聞いてもらった経験	44.92**	n.s.	>**	<*	<*
62. 人との関係の中での思い出したくない経験	20.57**	n.s.	>**	<*	<*
63. 人との関わりで傷ついた経験	n.s.				

(** $p<.01$, * $p<.05$, + $p<.1$)

<: 一般少年<非行少年 >: 一般少年>非行少年

定的変容が促進されると考えられよう。

また, 信頼感尺度を構成する各項目毎に両群の得点を比較すると, 自分への信頼・他人への信頼のいくつかの項目で有意差が見られ, 非行群は一般群に比べ ‘自分自身の行動コントロールへの信頼感’ ‘一般的な他者に対する信頼感’ ‘周りの人から自分が信頼されている感じ’ が少ないことが明らかになった。信頼できる特定の他者の存在に関しては両群で差異が見られなかったのに対し¹³, 非行群は一般群に比べ人一般に対する信頼感が乏しい傾向を示したという今回の結果からは, 非行群にとって信頼できる人は実際に存在するが, それが彼らにとって極めて特別なあるいは例外的な存在であることが考えられる。そして, 非行群は一般群よりも何らかの裏切られ体験により生じた心の傷を大きく感じており, それが人に対する一般化された

¹³ 信頼感尺度項目 “7. 私は現実には信頼できる特定の他人がいる” の得点について, 一般群と非行群との間で有意な差異が見られなかった (cf. TABLE 4)。

疑念や常に努力していないと自分自身が壊れてしまい
そんな感じとなっていることも示唆されよう。これは
すなわち、非行群では、信頼できる人の存在が他者一
般に対する信頼感と結びついてはいなく、信頼できる
ごく少数の人を身内、それ以外の人を世間とする心理
的な壁を作りやすいことが考えられるのではないかと。

ここから今回の結果を概観すると、不信の緩和を促
すこと、そして特定の他者への信頼を人一般および自
分自身に対する信頼と結びつけるようにすることが、
青少年の信頼感の発達を促し、引いては教育的援助に
って有効かつ重要となると考えられる。

2) 一般少年と非行少年の信頼感に影響を及ぼす経験
要因 信頼感に影響を及ぼす4つの経験要因、「受容
経験」「承認経験」「親との親密な関わり経験」「対人的
傷つき経験」からの信頼感への影響の仕方を両群で比
較すると、非行群では一般群よりも特に自分への信頼
についてこれらの経験の影響が大きかった。また、対
人的影響源の観点からみると、非行群は一般群に比べ
て同年代の仲間よりも大人からの影響を多く受けてい
ることが示唆された。例えば同じ承認経験でも、一般
群では“仲間から認められる”という経験が信頼感に
大きく影響しているのに対し、非行群では“大人から
の承認”の経験が大きく影響していた。そして、不信
については、一般群が不信を緩和したり好転させたり
する具体的な経験項目(e.g. 仲間からの承認、自分のこと
を思った上で本気で叱られた体験、わかってくれる人の存在)が
あったのに対し、非行群では人に関し、不信緩和に寄
与すると考えられる項目が見られなかった。

しかしながら今回の結果からは、不信感を緩和する
ためのいくつかの教育的援助が考えられる。例えば、
まず、大人からの承認によって信頼感に肯定的な影響
を与えて安定化させた上で、その特定の他者に対する
信頼感を一般的他者へも拡大させることが必要となる
だろう。そして、他律的規範から自律的規範への複雑
的な発達経路を念頭に置いた上で、非行少年の理解
の必要性の指摘(伊藤, 1994)からも、対人的影響源を大
人から仲間集団や友人といった同年代へと移行させ、
さらに友人等の他人による承認経験のもつ重要な位置
づけを能動的な自己承認へと移行させることが信頼感
の発達の促進につながると考えられる。

また、個人の信頼感の発達経路として、乳幼児期以
降の個人の対人経験も信頼感への影響を持っていると
考えられた。特に、親だけではなく、個人がその後出
会う身近な他者(主に大人)からの受容経験や承認経験
などをコアとして、信頼感は形成されることが示唆さ

れたといえよう。

まとめと今後の課題

本研究では、信頼感に影響を及ぼす要因を過去経験
として捉え、個人史における信頼感の発達経路を明ら
かにすると共に、教育臨床場面での応用への方途を探
ろうとした。高校生自身と彼らの発達援助者の視点か
らとらえると、信頼感に影響を及ぼす経験には「受容
経験」「承認経験」「親との親密な関わり経験」「対
人的傷つき経験」の4側面が見出された。また、重回
帰分析によると、自分への信頼には「承認経験」が、
他人への信頼および不信には「受容経験」と「対人的
傷つき経験」が影響力をもつことが明らかになった。
さらに、男子のみを対象にした、一般群と非行群との
比較からは、非行群においては特に自分への信頼に対
して、これら4経験からの影響力が一般群よりも大き
いことが示された。項目別に見ると、一般群が友人か
らの承認経験や主体的な達成経験により信頼感が獲
得・形成されるのに対し、非行群では評価者(主に大人)
からの承認経験および受容経験によることが示された。
ここから、教師やカウンセラーなどの発達援助者は、
まず、大人からの承認経験や受容経験を通じて信頼感
を獲得かつ安定させると同時に、その影響源を同年代
の仲間との関わりによるものへと移行させ、最終的に
は自身による肯定的な信頼感機能の確立と活性化へ移
行させることが重要であると考えられた。

今後は、今回見出された信頼感に影響を与える経験
の個人間における差異をさらに検討し、教育現場での
適用をめざしたより具体的な信頼感の発達援助モデル
を作成する必要があると考えられる。

引用文献

- 天貝由美子 1995a 高校生における信頼感の構造
平成6年度筑波大学修士論文(未公開)
- 天貝由美子 1995b 高校生の自我同一性に及ぼす信
頼感の影響 教育心理学研究, 43, 364—371.
- 天貝由美子 1997a 成人期から老年期に渡る信頼感
の発達—家族および友人からのサポート感の影響
— 教育心理学研究, 45, 79—86.
- 天貝由美子 1997b Self-Esteemを規定する要因と
しての信頼感—その生涯発達の变化— カウンセ
リング研究, 30, 103—111.
- Erikson, E.H. 1955 *Childhood and society*. W.
W. Norton, New York (仁科弥生訳 1980 幼児
期と社会 みすず書房)

- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle (selected papers of E.H.Erikson)*. International University Press, New York (小此木啓吾訳編 1973 自我同一性 誠信書房)
- 藤田裕司 1992 第3部心理療法 2.対象別心理療法 非行の心理療法 氏原寛・小川捷之・東山紘久・村瀬孝雄・山中康裕編 心理臨床大事典 培風館 Pp.257—259.
- Hansson, R.O., Jones, W.R., & Fletcher, W.I. 1990 Troubled relations in later life : Implications for support. *Journal of Social & Personal Relationships*, 7, 451—463.
- 伊藤美奈子 1994 理想像の分化と内面化に見る非行少年の心理的特徴 教育心理学研究, 42, 363—372.
- Katz, H.A., & Rotter, J.B. 1969 Interpersonal trust scores of college students and their parents. *Child Development*, 40, 657—661.
- Mitchell, C.E. 1990 Development or restoration of trust in interpersonal relations during adolescence and beyond. *Adolescence*, 25, 847—854.
- 麦島文夫 1990 非行の原因 東京大学出版会
- 杉原一昭・天貝由美子 1996 特性的および類型的観点からみた信頼感の発達 筑波大学心理学研究, 18, 129—133.

付 記

本論文をまとめるにあたり、ご指導いただきました筑波大学心理学系教授 杉原一昭先生に、心よりお礼を申し上げます。また、貴重なご示唆をいただきました筑波大学 新井邦二郎先生、桜井茂男先生、藤生英行先生、同 心理学研究科の Simon Downes さん、そして調査に際して心強いお力を賜りました各校の先生方ならびに生徒の皆さんに、深く感謝いたします。

(1997.5.6 受稿, '98.12.24 受理)